

は し が き

人生をかけることになるかもしれない教職とはどのような職業なのか。本書はそれを覗いてもらうために編集したものです。みなさんも報道などで教職の大変さを色々と目にし、耳にしていることでしょう。制度や環境を整えても個人の労力によってしか解決できない問題もあります。しかし、だからこそ教職に魅力を感じる人もたくさんいることを心に留めてください。

みなさんの高校卒業までの学習は、教師にもよりますが、社会のきれいに割り切れない部分にはふみ込まないことが多かったのではないのでしょうか。教職は割り切れない部分の大きい職業の1つです。そのような職種自体が、学問で追究する対象になります。本書ではところどころそのような部分も現れます。

教職に就くためには、教育職員免許状が必要ですが、取得するために学ぶ内容には、教師という職業にかかわる部分と、教科内容にかかわる部分とがあります。そして実習もあります。大学が一般教育（general education）と専門教育から成り立っていることは、すでにみなさんもお存知でしょう。しかし教職課程はまた別の位置づけの体系をもち、人が育つこと、ものごとを学び理解すること、人を育成することを扱う学問からなります。人と人とのコミュニケーション、教え方・伝え方の技法、社会規範の枠組み、制度化のしくみ、そして教育を軸とした歴史、などがあります。見方を変えれば、それらの内容は人の成長をめぐるさまざまな問題を多角的にとらえる総合的な内容なのです。

科目は教員免許取得という目的で統一的に構成されていますが、それらは大学の専門教育といってよい内容です。ですから教員養成を専門にした学部もあるのですが、教職課程は自然科学、社会科学、人文科学、体育・芸術などを専門として学びながら教員になりたい学生が教員免許を取得できるように設けられています。それが開放制と呼ばれる教員養成制度です。教育現場には、多くの領域の専門教育を学んだ人たちも必要だからです。

本書は、教員養成を専門的に学ぶ学部を選ばずに、大学に進学したみなさんに、魅力のある教職課程を覗いてもらいたいという意図で執筆されています。

教員養成を目的とする学部と開放制の教職課程は、2つの制度間の競争を生み出しているといってもよいでしょう。教員になるためには、教員になるための知識を専門的に学ぶ方がよいのか、それとも教科内容に関する深い知識をもって、教職に関する知識は補完的に学ぶ方がよいのか。日本の教員養成制度は、そのような異なる2つの価値観の競いあいの上に成立しているのです。

ただし本書は、教員養成を目的とした学部で学ぼうとする学生にも、そして社会人となった後で通信制大学の教職課程で教員免許を取得して人生の再出発を図る人たちにも、教職の魅力を知らせる入門書になっています。

教職の魅力とは次のような判断が求められる職業だということにあります。

筆者が以前勤めていた大学でゼミ生だった男子学生が、教育実習から帰ってきてこんな経験を話してくれました。配属された小学校3年生の学級で給食指導をしていた時のことです。

当日の配膳で給食が1人分足りず、給食当番の児童が給食室に1人分の惣菜を取りに行った。その間にもう1人の当番の児童が、先に給食を始めようと「いただきます」の号令を掛けた。彼はびっくりして「きみたち、何を考えているんだ！ 1人が足りない給食を受け取りに行っているだろう。そんなことをしてよいと思っているのか！」と一喝した。言ってからやり過ぎたかなと思ったが、子どもたちは納得した。その日担任の先生から「これは後から言っても役に立たない。その直後に叱ったからこそ教育効果があった」と絶賛された。

その咄嗟の一喝の絶妙のタイミングに対して学問的には「教育的瞬間」(pedagogical moment)という語が与えられています。教職の魅力の1つはそれをとらえられるかどうか、教師が常に勝負をしているところにあります。

この事例でもう1つ重要なことは、実習校で指導した担任の先生の価値観が一致していたことです。つまり取りに行った児童を待たなくてはいけない、その場ですぐに叱らなければいけないと判断する価値観です。教職は、そのような価値観を共有している職場だということにも魅力があるのです。本書をきっかけに、そのような価値観を共有できる人が増えることを願っています。

編者 所澤 潤



生き方を見つめる

序章では、人の生き方を見つめ、自分の生き方を見つめるということを取り上げます。教職課程の授業を受けるみなさんには、本書がそのことを考えるきっかけとなることを期待しています。

教師という仕事は、生き方を見つめる仕事です。まずそのことを伝えたいと思います。そう書くと教え子の生き方を見つめる仕事だともうかみませんが、強調したいのは、自分の生き方をも見つめる仕事だということです。これからみなさんは教職課程の科目を履修するわけですが、そのことを考えながら受講すると、教職課程の学びも実りのあるものになります。

学校にはさまざまな校種があります。みなさんがいまよく知っているのは進学のための塾や予備校でしょう。英語などの会話学校、留学生のための日本語学校もありますし、資格や技術を取得するための学校、アメリカンスクールなど外国の教育を行う学校もあります。しかし、本書は、皆さんが学校教育法（昭和22年法律第26号）の第1条で定められた学校（いわゆる一条校）で、法律で定められた資格である教員免許を所持して仕事をする、ということを前提にして、教員免許を取得できるようにと執筆しています。免許とは免許をもたない者はその仕事に携われないという意味です。自動車が運転免許をもたない者に運転できないのと同じです。

ただし、本書には、一条校以外で教職に取り組んでいる方々にも参考になる内容も含めています。本書は、免許取得に限らず、人を教えるという活動の普遍性に踏み込もうとしている部分も多いからです。

大学の教職課程は、大学卒業と同時に免許が取得できるように構成されています。開講される科目は法令に定められています。しかし、重要なのは、教師が人の生き方と関わる職業であるにもかかわらず、法令では、どのような生き方が望ましいかについてはまったく言及していないという点です。

教育基本法の第9条に「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない

い。」とありますが、「修養」という枠組みはあっても中身についてはふれていないのです。つまり修養を通して、自ずと内容が定まるという考え方です。そのようなことは、法律が指示するものではなく、社会の意識と歴史的なものの積み重ね、そして教師自身の判断の積み重ねに従うものだと、日本では考えられているのです。

皆さんは、これから、自分自身の教師としてあるべき姿を考えていかなければなりません。序章で話題にしたいのは、教師自身の生き方とはどのようなことか、そして自身の生き方を見つめるとはどのようなことか、ということです。筆者はそのことを、自身の経験した恩師との思い出で語ってみようと思います。

筆者は、1961年に東京都渋谷区立長谷戸小学校に入学しましたが、4年生から6年生まで2学級を、2人の担任教師が持ち上がりで教えました。2人の教師は両学級の学力を驚くほど向上させたのですが、ここでは2人の教師の生き方のほうに焦点を当てたいと思います。

筆者の学級の担任になったのは、文京区から転任してきた桐山甲子治教諭でした。桐山教諭は、7月になると教室で成績についてこんな説明をしました。「今学期、成績は、自分がみて判断した通りにつけます。3年生までの成績はまったく関係ありません。もちろん3年生までの担任の先生からは皆さんの成績の書類を受け取っていますが、先生はまったく見ていません。みんなの成績を自分でつけてから、前の先生がつけた成績を見ます。どのぐらい違うか楽しみです。」

学級にセンセーションが広がったことを今でも覚えています。新しい担任になって、授業の雰囲気は3年生までとまったく違っていたので、3年生まで成績が悪かった同級生たちはみな、その話で少し希望の光が見えたような雰囲気になったのです。筆者も、3年生までとても成績が悪かったので、その1人でした。はじめてその先生の通知表が配られた時、筆者は学級平均より少しよい成績がついていたのでほっとしたのですが、自分の成績によるこんでいた同級生がたくさんいました。

当時も今も、前の担任の申し送りの書類を確認しないことは職務として許されないことなのですが、それでも、当時そんなことを問題にする保護者は誰も

先生になる

チップス先生は、イギリスの架空の学校ブルックフィールド校に1870年から1918年までラテン語とギリシャ語の教師として勤めていました。ヒルトン作の名作『チップス先生、さようなら』は、彼の教職人生の転機を鋭く描き出す小説です。彼の凡庸な教師生活は、1896年に48歳で若い理想主義者の女性と結婚したことで一変します。生徒に対する叱り方が変わり、ユーモアのセンスが開花したのです。しかし作品は次々に辛いできごとを描きます。結婚2年後に妻が胎児とともに亡くなります。それに、当時起こっていた戦争で教え子や同僚が亡くなることも続きます。元同僚ドイツ人教師が戦死した時には、学校の戦死者追悼式で敵側であるにもかかわらず追悼の辞を述べ、同僚や生徒の度肝を抜きます。彼の場合、先生であるとは、そうした辛さと悲しみを伴う人生を生きることだったのです。子どもがいなくても何千人もの教え子がいる、という思いをもって彼は85歳で亡くなります。

キーワード：教職、社会的存在、専門性、緊張関係、教育的瞬間

第1節 仕事が人を作る

1. さまざまなことができる教職

仕事は人を作ります。これからみなさんが大学で学び、大学を卒業して就職すると、仕事をすることによって自分自身が成長していきます。みなさんを待っている仕事は、どの仕事でもみなさんを成長させます。教職もその1つです。ただし、選ぶことが可能な職種のなかでも、自分を作る非常に大きな可能性の広がっている仕事の1つだ、ということを、まず説明したいと思います。

みなさんは、大学に入学する前に教員になろうという選択をしていない人が大半です。自分はいったい何に向いているのだろうか、自分の一生の仕事として何を選ぶべきだろうか。それは、さまざまな職業への機会が開かれている今日にあっては、当然の迷いです。

しかし、その一方で、かりに学問に打ち込んでみたり、スポーツや芸術活動に打ち込んでみたりしても、それを専門的な職業にするのは容易ではありません。それらのルートは、大学を卒業することが職業に直結しているわけではないからです。スポーツや芸術に比べれば、学問は大学院が研究者養成機関となっているため、もう少し多くの人に開かれています。しかし、それでも生活費も将来も保障されていない大学院を選ぶのには相当な覚悟が必要です。

かといって、生活の糧が保障されることを求めて、企業や公務員の仕事に就けば、余暇にスポーツも芸術も、そして学問も続けるのは容易ではなく、多くの人は落伍してしまいます。

教職はその道の専門家、プロとは異なりますが、しかし多くの職業と違って、自分の行いたいスポーツ、芸術活動そして学究活動に携わる機会が、職業の一部として提供される可能性の高い職種です。

2. 教職の特性

そのような教職は、みなさんに2つの特性をもたらすことになります。第1の特性といってよいのは、自分が学究に関わる社会的存在になり、全国の学究的な活動の一端を担う機会に出逢うことがあるということです。実は全国的なスポーツ活動や芸術活動も多く、教員が指導的立場から担っているのですが、本章では学究的な活動に目を向けます。

そして第2の特性は、結果に拘泥することなく日々の営みに集中する存在になっていくことです。たとえすぐれた結果が出て評価されたとしても、結果を生み出した能力よりも、結果が出てくるまでの努力とプロセスを大切にする自分が生まれるということです。

最初に、仕事が人を作る、と述べました。社会的存在としての自分は、その2つの特性を軸にして社会との関わり、そして多数の児童生徒との関わりを通して形成されていきます。2つの特性は自分を見つめ直す機会を頻繁に作り出し、そのため自分の人格がおのずと磨かれていくからです。そのことは結果的に、社会において模範となるような自分、児童生徒に模範となるような自分を形成していくことにもなります。

学級を育てる

これまでの学校生活をふり返ってみて、みなさんはどのような学級が記憶に残っていますか。どのような仲間や先生と出会い、どのようなことを語りあいどのように過ごしていましたか？ きっと、思い出に残るエピソードは、誰にでもあるでしょう。そしてそのなかには、自分の進路や生き方に影響を与えた人との出会いや出来事もあったのではないのでしょうか。その思い出は、みなさんが生徒として過ごしたなかで感じたことですが、この章では、教師の視点から眺めてみたいと思います。あの時のあの先生の言葉や行動にはそんな思いがあったのか、とか、特に気にも留めていなかったけれど、あの日常の裏にはこんなにも多くの準備がなされていたのかなどなど。教職科目を学ぶ際のおもしろさは、このように視点を変えて考えてみるところにもあるのかもしれませんが。キーワード：視点を変える、教育的愛情、生徒のホンネ、変化を起こす、ソリューションフォーカストアプローチ、問題の外在化、自我関与

第1節 教育的愛情をもつ

1. 視点を変える

長年教師をしていると、荒れている学級を担当することもあります。その学級の生徒たちは、満たされない何かを、荒れることで紛らわしているようにも見えました。もちろん、その荒れを何とか鎮めようと、力づくで押さえつけようなどと考えるのはもってのほかです。そのようなことをしたら、鎮まるどころか、かえって反発は強まり、状況はますます悪化するばかりです。

視点を変えると、荒れるということは、それだけたくさんのエネルギーがあるということです。そのエネルギーの使い道を少し変えるだけで、逆にとてもいいクラスになるのです。きっと、荒れている学級を立て直す醍醐味は、そこにあるのだと思います。私たち教師にできることは、生徒の有り余るエネルギーを、自分や人を傷つけることに使うのではなく、自分の可能性を見出し、自分

の幸せや人の幸せ人の役に立つことに使えるよう、お膳立てすることです。そのためにも、まずはその生徒のことを知ることから始めましょう。

生徒のことを知るためには、その生徒をひとりの人間としてよく観ることです。「見る」ではなく「観る」です。「見る」と「観る」の違いは、自分の意識にあります。視界に入ってくるものをただ何気なく見るのではなく、ある意図をもって目を向けて観るのです。

2. 活躍の場をつくる

中国の唐の時代の文人、韓愈の『雑説』に「千里の馬は常に有れども伯楽は常に有らず」という言葉があります。これは、有能な人材はいつの世にもいるが、その能力を見いだして育てる優れた指導者は少ないということのたとえです。いかに才能のある生徒でも、その人の素養を見抜いて育ててくれる先生と出会えることで、その生徒は力を発揮することができるのです。

教育は未来を創る仕事です。生徒の素養を見抜くために私たちにできること、それが生徒をよく観ることです。教育的愛情をもち、生徒のできていないことや困った行動に焦点を当てるのではなく、視点を変え、生徒の好きなことや得意なこと、すでにできていることやできるようになった瞬間を見逃さないことです。そして、生徒一人ひとりの好きなことや得意なことを活かす機会、活躍の場をつくることで、生徒は自然とそこにエネルギーを注ぐようになります。きっと、みなさんも、自分の好きなことや得意なことで、学級に貢献してきたのではないのでしょうか。

3. 生徒の目線

私が教員3年目のころ、年に1度、区内の中学校合同での展示発表会がありました。生徒の作品を区のホールに搬入し1週間程度展示します。搬入の際はお手伝いの生徒を連れて行きます。学級の代表や美術部の生徒で気の利く生徒、先生に言われなくても次から次へと動ける生徒に手伝ってもらうのが一般的ですが、私の学校はその逆でした。学校にいと手のかかる生徒、授業妨害をしたり、教室を抜け出したりする生徒たちがお手伝いの候補者となります。

（１）役割が生徒を育てる

役割には、責任と権限（この活動では権利の方がわかりやすいでしょう）があります。この活動の場合、搬入のお手伝いという役割における責任とは、限られた時間のなかで限られたスペースに、先生と一緒に作品を見栄えよく展示すること。権利とは、授業免除と１人600円の食券がもらえることです。

搬入当日、先ほどの条件を満たす５人の生徒たちは、なぜ自分たちが選ばれたのか知ることなく、朝からウキウキしていました。ホールに着くと、驚くことにどの学校の生徒たちよりも素早く準備に取りかかりました。その姿は実にけなげでした。少しでも役に立とうと、彼らなりに一生懸命だったのでしょう。ここに来るまでは、彼らにお手伝いが務まるか、正直不安でした。しかし、不器用ながらも、次から次へと働く姿に、頼もしささえ感じました。役割を与えること、信じて任せることで、人は成長していくということを肌で感じました。

（２）生徒のホンネ

ひと区切りついたところで、待ちに待ったランチタイムです。彼らは、授業では見せたことのない真剣な表情で、料理サンプルの並んだショーケースを見つめ、チキンライス（600円）にするかチキンステーキ（700円）にするかで迷っていました。「先生、食券ってひとりいくら？」「ひとり700円、食べたいものを選んでね」私は嘘をつきました。当時は、ステーキなどなかなか食べられない時代でした。この特別な日に、彼らがチキンステーキを選ばないはずがないと思ったのです。

ところが予想に反し、彼らは全員、チキンライスを選びました。「本当にチキンライス？ チキンステーキじゃなくていいの？」と何度か聞き返しましたが、「チキンライスが食べたい！」「僕も、チキンライス！」と口々に言うのです。ほどなくして、テーブルにはチキンライス用のスプーンとサラダ用のフォークがセットされ、あとはチキンライスが来るのを待つばかりとなったその時です。隣のテーブルに座っていた他校の生徒が、チキンステーキをお箸で食べ始めたのです。「えっ!? 先生！ あり？」と、鳩が豆鉄砲を食ったような顔で聞くのです。彼らが何のことを言っているのか、すぐには理解できませんでし

た。「お箸で食べるの、あり？」と言われてやっとその真意を悟りました。「もちろん」と答えると、一斉に「うっそ〜、ありがよ〜」と言って、スプーンを握りしめました。

「本当はチキンステーキが食べたかった……」と、1人の生徒が語り始めたのです。フォークとナイフを使ってお肉を食べたことがない自分が、チキンステーキを注文して先生に恥をかかせてはいけないと思い、注文できなかった……。生徒の思いがけない言葉、普段の彼らからは想像もつかない生徒のホンネを聞きながら、目頭が熱くなりました。

その後、彼らはチキンライスをペロッと食べ念願のチキンステーキをご馳走すると、これまたお箸でペロッと食べ、午後の展示にとりかかりました。

(3) 公教育でもできること

教員生活が3年目の私は、この一件で、生徒の目線で考えることの大切さを学びました。そして、学校に戻るとすぐに、校長先生と栄養士さんをお願いに行きました。

教材費の滞納があると給食の品数が減っていく学校でした。無理なことは重々承知です。しかし、お願いせずにはいられなかったのです。年に1度でもいいので、小さくてもいいので、給食の献立にチキンステーキを入れてほしい、チキンステーキを切るためのナイフも準備してほしい、ということ。そして数か月後、給食に変化が起きました。クリスマスメニューと卒業メニューの献立に、チキンステーキが加わりました。食器にはナイフも用意されました。

生徒たちは誰も知りません。もちろん、搬入のお手伝いをしてくれたあの5人の生徒たちも。なぜ、チキンステーキが献立に加わったのか、給食の食器にフォークのほか、ナイフが追加されたのかを。

■ 第2節 膠着状態を脱出するための変化を起こす

PDCA（Plan：計画・Do：実践・Check：検証・Action：改善）サイクルにR（Research：実態調査）を加えたRPDCAサイクルを活用している学校も増えてきました。授業はもちろん、行事や生徒指導などについて日常的にRPDCAを活用します。